

令和2年度病害虫発生予報第10号の発表について

このことについて、次のとおり発表したので送付します。

《予報の概要》

作物名	病害虫名	予想発生量
ブロッコリー	黒腐病	やや少
	花蕾腐敗病	並
	べと病	やや少
	菌核病	並
レタス	灰色かび病	やや少
	菌核病	並
	べと病	やや少
	腐敗病	並
	斑点細菌病	並
	ナモグリバエ	並
タマネギ	べと病	やや多
	白色疫病	並
タマネギ、ニンニク	ネギアザミウマ	やや多
野菜、花きの 共通害虫	アブラムシ類	やや多

太文字の病害虫：向こう1か月の間、発生状況に特に注意を要する病害虫を示す。

*予報根拠中の記号

- (+)：発生量を多くする要因
- (-)：発生量を少なくする要因
- (±)：発生量が平年並になる要因

令和2年度 病害虫発生予報 第10号(2月)

A. 野菜、花きの病害虫

ーブロッコリーー

1. 黒腐病

予 想 発生量 : やや少

- 根 拠 (1) 1月下旬の1～2月どりの発生量はやや少なかった。(－)
(2) 2月の気象は降水量が平年並の予報である。(±)

- 対 策 (1) 薬剤散布は、予防的に実施し、初期感染を防ぐことによって散布回数を減らすよう努める。害虫の食害痕等からも病原菌が侵入するので害虫防除を徹底する。
(2) 降雨や寒波に伴う強風の後などは、できるだけ速やかに薬剤防除を行う。
(3) 発生の多い圃場では発蕾までの防除を徹底する。

2. 花蕾腐敗病

予 想 発生量 : 並

- 根 拠 (1) 1月下旬の1～2月どりの発生は平年と同様に認めなかったが、一部の地域で発生量がやや多かった。(＋)
(2) 2月の気象は降水量が平年並の予報である。(±)

- 対 策 (1) 降霜などによって発病が助長されるので、低温が予想される場合には防霜対策を施す。
(2) 薬剤防除は予防的に実施し、銅剤を使用する場合には発蕾期以降の散布は避ける。

3. ベと病

予 想 発生量 : やや少

- 根 拠 (1) 1月下旬の1～2月どりの発生は認めなかった。(－)
(2) 2月の気象は降水量が平年並の予報である。(±)

- 対 策 (1) 圃場の排水を良くするとともに、窒素過多にならないよう肥培管理する。
(2) 降雨後や曇雨天で多湿状態が続くときは薬剤防除を行う。
(3) 耐性菌の発生回避のため、同一系統の薬剤を連用しない。
(4) 発病株は見つけしだい抜き取って圃場外に持ち出すなど適正に処分する。

4. 菌核病

予 想 発生量 : 並

- 根 拠 (1) 1月下旬の1～2月どりの発生量はやや少なかったが、一部地域で発生量がやや多かった。(±)
(2) 2月の気象は降水量が平年並の予報である。(±)

- 対 策 (1) 発病株は見つけしだい抜き取って圃場外に持ち出すなど適正に処分する。
(2) 発生の多い圃場には連作しない。
(3) 薬剤散布は株元を中心に、丁寧に行う。

ーレタスー

1. 灰色かび病

予 想 発生量 : やや少

- 根 拠 (1) 1月下旬の発生量は1～2月どり、3～4月どりともにやや少なかった。(－)

- (2) 2月の気象は降水量が平年並の予報である。(±)
- 対 策 (1) 温度較差が大きいと発病が助長されるので、夜温が低い場合には日中温度が上がりすぎないように、除湿をかねてこまめに換気する。
- (2) 発病株は見つけしだい抜き取って圃場外に持ち出すなど適正に処分する。
- (3) 圃場の排水を良くする。
- (4) トンネル被覆後は薬剤がかかりにくくなるので、散布むらに注意して薬剤防除を行う。
- (5) 苗床からの持ち込みを防ぐため、苗床での薬剤防除を行う。
- (6) 耐性菌の発生回避のため、同一系統の薬剤を連用しない。

2. 菌核病

- 予 想 発生量 : 並
- 根 拠 (1) 1月下旬の発生量は1～2月どりでは少なく(－)、3～4月どりではやや少なかった(－)。
- (2) 防除員報告では発生量のやや多い地区があった。(＋)
- (3) 2月の気象は降水量が平年並の予報である。(±)
- 対 策 (1) 温度較差が大きいと発病が助長されるので、夜温が低い場合には日中温度が上がりすぎないように、除湿をかねてこまめに換気する。
- (2) 発病株は見つけしだい抜き取って圃場外に持ち出すなど適正に処分する。
- (3) 圃場の排水を良くする。
- (4) 灰色かび病防除に準じて対策を実施する。
- (5) 灰色かび病の耐性菌の発生回避のため、同一系統の薬剤を連用しない。

3. ペト病

- 予 想 発生量 : やや少
- 根 拠 (1) 1月下旬の発生は1～2月どりでは認めず(－)、3～4月どりでは平年と同様に認めなかった(±)。
- (2) 2月の気象は降水量が平年並の予報である。(±)
- 対 策 (1) 発生前から薬剤を予防的に散布する。この場合、薬剤が葉裏に十分付着するよう散布する。
- (2) 結球期に発生すると、結球葉まで病気が進展しやすいので、発生を認めたら直ちに防除する。
- (3) 圃場の排水を良くするとともに、トンネル内部が過湿にならないように換気に留意する。
- (4) 被害残渣は圃場外に持ち出すなど適正に処分する。

4. 腐敗病

- 予 想 発生量 : 並
- 根 拠 (1) 1月下旬の発生量は1～2月どりでは平年並、3～4月どりでは平年と同様に発生を認めなかったが、一部地域で発生量がやや多かった。(＋)
- (2) 2月の気象は気温が高く(－)、降水量が平年並(±)の予報である。
- 対 策 (1) 凍霜害にあった場合は速やかに薬剤防除を行う。
- (2) 腐敗病に対する感受性は結球期以降に高くなることから、結球初期を中心に予防的防除を行う。
- (3) トンネル内に不織布をべたがけにして保温性を高め、凍霜害を軽減する。
- (4) 圃場の排水を良くするとともに、トンネル内部が過湿にならないように換気に留意する。
- (5) 収穫は適期に行い、発病の増加のおそれがある場合は早めに収穫を行う。

5. 斑点細菌病

予 想 発生量 : 並

根 拠 (1) 1月下旬の発生は1~2月どりでは平年と同様に認めず(±)、3~4月どりでは認めなかった(-)。

(2) 防除員報告では発生量のやや多い地区があった。(+)

(3) 2月の気象は降水量が平年並の予報である。(±)

対 策 (1) 温度較差が大きいと発病が助長されるので、夜温が低い場合には日中温度が上がりすぎないように、除湿をかねてこまめに換気する。

(2) 育苗は風当りの少ないところで行い、できるだけ傷をつけないように管理するとともに、軟弱徒長にならないよう注意する。

(3) 圃場の排水を良くする。

(4) 強風を伴う降雨が続いた後には薬剤防除を行う。

6. ナモグリバエ

予 想 発生量 : 並

根 拠 (1) 1月下旬の発生は1~2月どりでは認めず(-)、3~4月どりでの発生は平年と同様に認めなかった(±)。

(2) 2月の気象は気温が高い予報である。(+)

対 策 (1) 苗床は防虫ネットで被覆し、成虫の侵入防止対策を講じる。

(2) 定植時には粒剤処理または灌注処理する。

—タマネギ—

1. ベと病

予 想 発生量 : **やや多**

根 拠 (1) 1月下旬の早生栽培での発生は平年と同様に認めなかった。(±)

(2) 防除員報告では発生量やや多い地区があった。(+)

(3) 2月の気象は気温が高く(+)、降水量が平年並(±)の予報である。

対 策 (1) 越年罹病株は早急に抜き取る。

(2) 圃場を見回り、発生を確認した場合は直ちに薬剤散布する。

(3) タマネギと同一の病原菌によってネギにも発病するので、今後の発病に注意する。

(4) 排水不良は発病を助長するので、圃場の排水を良くする。

(5) 薬剤散布を行う場合には耐性菌の発生を回避するため、同一系統薬剤の連用は避ける。

2. 白色疫病

予 想 発生量 : 並

根 拠 (1) 1月下旬の早生栽培での発生は平年と同様に認めなかった。(±)

(2) 2月の気象は降水量が平年並の予報である。(±)

対 策 (1) 圃場を見回り、発生を確認した場合は直ちに薬剤散布する。

(2) 排水不良は発病を助長するので、圃場の排水を良くする。

(3) 本病が発生すると腐敗病などの細菌病が二次感染することがあるので、今後の腐敗病の発生に注意する。

(4) 薬剤散布を行う場合には耐性菌の発生を回避するため、同一系統薬剤の連用は避ける。

－タマネギ、ニンニク－

1. ネギアザミウマ

予 想 発生量 : **やや多**

- 根 拠 (1) 1月下旬の発生量は早生栽培では平年並であった。(±)
(2) 2月の気象は気温が高く(+)、降水量が平年並(±)の予報である。

- 対 策 (1) 圃場内及び圃場周辺の除草に努める。
(2) ネギアザミウマの食害痕から病原菌が侵入する可能性があるため、葉に食害が認められる場合は早期に防除を行う。
(3) 抵抗性の発達回避のため、同一系統の薬剤を連用しない。

－野菜、花きの共通害虫－

1. アブラムシ類

予 想 発生量 : **やや多**

- 根 拠 (1) 1～2月どりブロッコリーでの発生量は平年並であった。(±)
(2) レタスでの発生は1～2月どり、3～4月どりともに平年と同様に認めなかった。(±)
(3) 2月の気象は気温が高く(+)、降水量が平年並の予報である(±)。

- 対 策 (1) 施設栽培やトンネル栽培等では、今後増殖するおそれがあるので注意する。
(2) モザイク病の初期感染を防ぐため、苗床での防除を徹底する。
(3) 抵抗性の発達回避のため、同一系統の薬剤を連用しない。

・住宅地等に接した地域及び広範囲に防除する場合は、散布する前に付近住民などに周知するとともに、飛散しにくい農薬を使用するようにしましょう。
・農薬散布は、無風又は風が弱いときに行うなど、近隣に影響が少ない天候の日や時間帯を選び、風向き、ノズルの向き等に注意して飛散防止を心がけましょう。

農薬はラベルをよく読んで使用しましょう

病虫害防除所インターネットホームページ

URL: <http://www.jppn.ne.jp/kagawa/>